
1月22日 「『ぶどう園の労働者』のたとえ」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 20章1～16節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問29

〔単元のねらい〕

神の考え方・天国の価値観と、人間・地上のそれとの違いが明らかにされます。午後5時から働いた人間は、雇われる機会を失い広場に立っていました。神は、彼らの不安を顧みられました。神は、労働の対価としてではなく、ご自身の恵みを注がれます。早朝から働いた人間は、神と共に働くことができたことを喜び、感謝すべきです。ところが、人間の公平は、神の公平に対してつぶやきます。私たちの「働き」に、他人と比べてより豊かに、より高くなろうとする意識がひそんでいることが明らかにされます。値なくして救われた罪人としての認識を深めるときだけ、地上にあって、天国の価値に生きることができます。子どもたちに、この神の恵みのなかでこそ、正しく努力することが可能になることを伝え、神の国の拡大、その栄光のために共に働くように招き、励ましたいと思います。

「イエスさま、わたしたちの宍らぎ、居場所」

イエスさまは、天国は、どんなところか、神さまはどのようなお方なのかを、譬え話で教えてください。

ある家のご主人が自分のぶどう園で働く労働者を雇うために、広場に出かけて行きました。そこは、働きたいと願っている人たちが集まる場所でした。朝一番、おそらく6時頃に集まっている人たちに、こう呼びかけました。「一日働いてくれたら、一デナリオンさしあげましょう。」

朝の9時にも、行ってみました。すると、まだ人がいました。ご主人は言いました。「さあ、わたしのぶどう園で働いてください。ふさわしい賃金をはらいますから。」その人たちは、喜んで行きました。

さらに、ご主人は、お昼の12時、そして午後3時にも行って、同じように言いました。

日も傾く5時、一日ももう終わろうとしています。ご主人は、また、広場に行ってみました。なんと、まだ人が立っていました。ご主人は、たずねました。「何故、一日中、ここに立っているのですか。」彼らは、暗い目をして、こう答えました。「誰も雇ってくれないのです。ご覧の通り、丈夫な体ではありませんし……。」すると、ご主人は、大きな声で言いました。「さあ、急いでください。

わたしのぶどう園に行ってください。」

その人たちがぶどう園につく頃には、もう、夕方になってしまいました。ご主人は、働いていた人たちを監督していた人に、命じました。「さあ、働いてくれた人たちを呼んで、約束通り、お金を払ってあげてください。」「いちばん最後に来た人から順にしてください。」こうして、ぎりぎり間に合った人たちに、一デナリオンがはらわれました。

さて、後ろからこれを見ていた人たち、つまり、朝から働いていた人たちは、目の色が変わりました。「あんな奴らでも、一デナリオンか。元気に、バリバリ働いた私たちには、いったいいくらくれるのだらう。」ところが、監督は、約束した通り、一デナリオンだけ払いました。

そのとき彼らは、真っ赤な顔をして、ご主人に文句を言い始めました。「こいつらは、1時間しか働いていませんよ。私たちは、朝から晩まで、暑い中を辛抱して働いのです。何故、いっしょにするのですか。不公平です。」

さて、皆さんは、どう思いますか。きっと、「そんな不公平だね。1時間で一デナリオンも

らったんだったら、朝の6時から夕方6時まで働いた人だったら、12時間で十二デナリオンもらわないと損だよ。」きっと誰もがそう考えることだと思います。

ところが、ご主人は、こう答えました。「愛する友達の皆さん。あなたたちに、悪いこと、不当なことはしていませんよ。最初に約束した通りのはずです。」「わたしの友達の皆さん。あなたたちが、よく働いてくれたのは、分かっています。でも、わたしは、最後に来たあの友達にも、同じように払ってあげたいのです。彼らは、働きたかったのだけれど、雇ってくれる人がいなかったのです。彼らは、どれほど、悲しい思い、空しい思い、不安な思いで、広場にいたことでしょう。わたしは、あなたたちと同じようにお金を払ってあげたいのです。」

もしも、朝から一生懸命に働いていた人たちが、最後にやってきた人と比べることをしなければ、どうだったのでしょうか。きっと、「今日も暑かったなあ。でも、一日、一生懸命仕事ができたと、お金もきちんともらうことができた。うれしいな。さあ、家族が待っている家に帰って、皆でご飯を食べよう。」そんな風に、喜んで家に帰って行ったと思います。どうしたら、よかったのでしょうか。比べなければよかったのです。

あるいは、悲しいですが、もしかすると、朝から働いた人たちは、こんな風に考えていたのかもしれない。「自分がたくさんお金をもらうのは、当然だ。働けるのも当然だ。頑張って早く起きて、広場に来たのだ。努力もしたし、最後に来た人たちとは違う。」

さて、これは、天国の譬えでした。皆の中で、「自分は、天国に入れて当然だ」と考えている人はいますか。その人は、ここで文句を言った人に似ています。

先生は、自分が天国に入れる人になったのは、

奇跡だと思います。神さまの恵み、なによりもイエスさまのおかげだと信じています。天のお父さまが、先生のことを「かわいそうだ。この友達にも、わたしの恵み、祝福を与えてあげたい。」そう考えてくださったから、イエスさまを信じることができたし、教会に来ることができたと思います。

ただ、正直に言うと、ときどき、文句を言った人と同じようなことを思ったり、言ってしまうことがあります。そんなとき、先生は、この譬えを思い起こします。

誰かが、こんなことを言います。「ここは天国じゃないよ。最後に来た人に、一デナリオン払う人なんているはずないよ。もし、そんなことをしたら、誰もまじめに働かなくなるよ。そんな教えは、おかしいよ。」

いいえ、違います。イエスさまは、もう、ここに天国を始めておられます。ここに教会があるのがその証拠です。

先生は、教会で奉仕できることを、大変なときもありますが、心から喜び、楽しんでいます。実は、天国の恵みを知った人は、一生懸命働きたくなるし、努力したくなるのです。人と比べなくても大丈夫だ、そんな必要はないのだと分かったら、自分の力を思いっきり出そうとするし、出せるようになるのです。

僕たち私たちは、天国に入れて頂ける約束を受けています。もう今、教会にいます。何にもすごいこと、立派なことをしていません。でも、神さまは、僕たち私たちに、天国の喜び、幸福を与えてあげたいと願ってくださったのです。つまり、神さまの恵みによって、祝福を受けているのです。だから、礼拝できているのです。神さまに、心から感謝します。僕たち私たちにできる神さまのお手伝い、天国を広げる奉仕をしたいと思います。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 11章28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

〈ねらい〉

信じる人には全てただで与えられる、天国のすばらしさに思いを馳せてみました。天国のすばらしさの多くは、まだ隠されていますが、聖書の言葉から、その一端を垣間見ることができ、それだけで心躍る思いがします。主はその恵みを、ぶどう園のたとえを通して、ただで受けなさいとわたしたちに促しておられます！

展開例ではぶどう園のたとえそのものの説明はしませんでした。労働賃金をごほうびと言い換えて、成績にかかわらず、皆に同じように与えられる天国の恵みを語ることはできると思います。

〈展開例〉

【お話】

天国ってどんなところかな？

そこにはイエスさまがいる。

けんかがない、

悲しみもない。

憎しみもない

苦しきもない

仲間外れもない

いじめもない

戦争もない

死もない、罪もない。

みんなやさしい

みんな仲良く愛し合っている。

さわやかな空、きれいな花々、

やさしい動物たち

こわくないし

しんばいもない

みんなでイエスさまを賛美して

いつまでもたのしく、よろこんで、

しあわせに暮らせるところ

そんなすばらしいところへどうしたら行けるのでしょうか答えは信じる人です。信じる人はみんなただで天国へ行けるのです。天国では一番も二番

もありません。だから成績もありません。どれだけ勉強したか、どれだけ働いたかに関係なく、先に天国に入った人も後から入った人も、天国でのしあわせはみんな同じように与えられるのです。

【祈り】

天の神様、あなたを信じてすばらしい天国へ行けますように。お父さんも、お母さんも、先生も、みんな天国へ行けますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（天国）〉

てんごくへ、いけるのは、

いえすさまを、しんじるひとです。

〈暗唱聖句カード〉

わたしのもとにきなさい



つか もの おもに お もの だれ わたし
 疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私
 のもとにきなさい。休ませてあげよう。
 (マタイ11:28)

ねらい

ブドウ園の主人（神）が労働者（人間）を雇い、朝の9時から雇った人と一日一デナリオンの賃金の約束をしたように、昼の12時から、午後の3時から、そして夕方の5時から雇った労働者にも同じ一デナリオンの賃金を支払った。それに対して朝から働いた労働者が主人に文句を言ったところ、それは通じなかったという話である。つまり、人間の労働や文化活動は、神に対しては、神の恵みに感謝する意味での働きであって、決して労働時間に準じた功績にはならないという話である。

展開例

人間の世界では、時間給であれば長い時間働いた分、給料は多く与えられる。それは、人間の労働には価値があるからと考えているからである。しかし、人間が神のために労働するというのは、人間の労働の価値・功績というより

も、神の恵みへの感謝の応答である。従って、時間の長短で差別が出ることはない。

神様への奉仕は功績にはならない。神様の恵みは、無価値な人間への一方的な神からの働きかけであるため、人間の神への仕事はただ感謝の応答という意味しか持たないのである。

それを他人との比較で、自分は他人より多く奉仕しているので、自分の価値がその分増えると考えerことは間違いである。神への奉仕は他人と比較して論じる性質のものではない。

祈り

私たちはいつも他人と比較して、神様に文句を言ったり、不平を言ったりしますが、それは間違いであることを知りました。自分と神との関係のみによって自分のなすべきことを考えさせてください。他人と比較して、自分のことを考えるくせを無くさせてください。

～ 話し合ってみよう ～

他人と比較して生きる場合と、神様と自分の関係を考えて生きる場合と、どちらが良いのか話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 20：1～16

暗唱聖句

疲れた者、重荷を負う者、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてやすませてあげよう。

(マタイ11：28)

〈ねらい〉

イエスさまは、天の国（神の国）の福音を宣べ伝えました。

「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならぬ。わたしはそのために遣わされたのだ。」（ルカ4章43節）

そして、イエスさまは父なる神さまをお示しになることによって、ご自身が神の子であり、メシアであることを示されました。また、力ある神のみわざによって、この地上でもイエスさまと共にいる所には、天の国（神の国）が存在することをお示しになりました。

今日の聖書の箇所は、この天の国（神の国）とはどんなところかということ、たとえではなされました。当時のユダヤ人の人たちの日常的事を用いて、天の国（神の国）をよくわかるようにお話しになりました。今日はこのぶどう園の主人と労働者とのたとえから学びましょう。

〈展開例〉

わたしたちは、1時間働いた者が1,000円の賃金をいただけるのであれば、5時間働いた者は当然5,000円の賃金が支払われるのが公平だと考えます。つまり、多くの時間働いた者は、少ない時間しか働いていない者よりかは、多くの報酬を受け取ることができると考えますね。

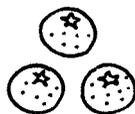
しかし、イエスさまのお話しされた天の国（神の国）では、午後5時ごろから夕方までのごくわずかな時間しかはたらいていない者も、夜明けの時間から夕方までまる一日中はたらいた者も、報酬は同じデナリオンでした。まる一日中はたらいた者たちから主人に対して、「最後に来たこの連中は、1時間しかはたらいていません。まる一日、暑い中を辛抱してはたらいたわたしたちを、この連中とを同じ扱いにするとはい」と不平を言い

ました。天の国の主人である神さまはその人に答えた。「友よ、あなたは不当なことはしていない。あなたはわたしとデナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」と。

このたとえのおはなしから、天の国（神の国）の福音について少し学びましょう。

天の国でわたしたちが受け取る報酬は、約束によるものであって、わたしたちの働きの大小ではないということです。天の国の主人の約束によって、ただ一方的な恵みによる報酬なのだという事です。その報酬の持ち主は神さまなのです。天の国（神の国）では、その主人である神さまのみこころがすべてであり、絶対なのです。ほとんど働かない、働く機会が少なかった人たちにも同じものが与えられる。これは恵みによるもの。ただそれだけなのです。わたしたちもこの地上において、自分自身の持ちものなんて何もありません。すべて神さまからの恵みによるものです。だから、今与えられているもので、充分ですと、その主人である神さまに感謝したいものです。

また、天の国の主人である神さまは、たとえ遅くなくても、必ずわたしたちを招きに来てくださいます。すでに招かれてご主人のご用のために働いている人もいますし、まだ招かれていない人もいますが、神さまはそのどちらの人も同じように大切な人として愛してくださっているのです。先に招かれたもの、最後に招かれたものも、神さまにとっては全く同じようにしてあげたいと願っているのです。「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」



対話の手掛かりとして……

- ①聖書を読む時に、大事なひとつのことは、御言葉の中に、自分自身の姿を見出すことです。聖書を読みながら、「あっ、これは私のことだ」と気付くことです。そして、神さまはそういう私に何をしてくださったのか、何を望んでおられるのかということに気付くことです。今回、主イエスがお語りになった譬え話においても、同じことが言えます。私たちは、この譬え話の中のどこに自分を見出すべきなのでしょう。どこに自分を見出すかでこの譬え話の理解が、ずいぶん違ってきます。
- ②どうも、私たちは一日中働いたにもかかわらず、一時間しか働いていない者と同じ賃金しかもらうことができなかつた労働者と重ねてしまいます。私はこれだけ頑張っているのに、全然報われない。そう思って周りを見渡すと、明らかに、私よりいい加減な生き方をしているのに、私より幸せそうにしている。そういう人たちを見ると、何て神さまは不公平な方なのだと腹を立ててしまうことがあります。あるいは一時間しか働かなかつた労働者と自分を重ねることもあるでしょう。一日働いても、一時間働いても、同じ賃金が与えられるのならば、楽をして稼いだ方がいいと考えるのです。そして、息情な生活、好き勝手な生活をしようと聞き直るのです。
- ③しかし、上にあげたいずれの立場で聖書を読んでみても、そこに本当の喜びを見出すことはできないのではないのでしょうか。そこで、少し考え方を切り変えて、譬え話に出て来る「ぶどう園の主人」の姿に注目してみましょう。主人とは、神さまのことです。主人はここでどういう行動をしているのでしょうか。繰り返し同じようなことをしていることに気付かされます。それは、何度も労働者を探しに出掛ける主人の姿です。たいへん熱心です。しかし、手間が掛かり、

効率がわるいことをしていると思う人もいるでしょう。一度にたくさんの労働者を見つけてくれば手間も省けるではないかと思うのです。しかし、主人は効率の良さを第一にして行動しているわけではありません。そうではなくて、誰にも雇ってもらえず、何もせず立ちすくむしか他ないひとりの存在を捜すことに熱心であられるのです(6~7節)。

- ④この譬え話において、私はどこにいますか。夕方になっても、職を得ることができず、立ったままでいる者たちであることに気付かされるならば、主イエスがお語りになった譬えのありがたみが深く伝わってきます。誰にも雇われず、自分は何の役にも立たないのだと落ち込みながら、立っている私を見つけてくださり、わたしのぶどう園で働きなさい、そう言って、私をひとりの価値ある人間として愛して関わってくださる。たとえ、一時間しか働くことができなくても、一日中働いた者と同じだけの恵みを与えてくださるのです。
- ⑤また、神さまは「気前のよい」お方です(15節)。気前のよい神は、私たちが考える次元で報いをお与えになる方ではありません。神さまの気前のよさは、誰がどれだけ働いたかということを超えて、その人に必要なものを、またその人にとって最も大切なものを与えてくださいます。私たちににとって最も大切なものとは何でしょうか。それは、主イエス・キリストによって与えられる救いの恵みです。私たちが今までどのように生きてきたかどうかを問うことなく、無償で、つまり賜物として与えられるのです。気前のよい神さまによって、救っていただいた自分、愛されている自分を再発見する時、この世的な平等の原則やものの見方に縛られる生き方から解き放たれるのです。

〈背景と文脈〉

主イエスは十字架の死を目前にされ、宗教的指導者たち、特に律法学者とファリサイ人を厳しく批判された。23章1～36節で、「あなたたち偽善者は不幸だ」と繰り返し語られ、彼らの偽善と高慢の罪、また霊的な指導者として神の期待に応え得なかった責任を厳しく追及されている。

24章2節で、主はエルサレム神殿の破壊を予告されている。これは紀元70年にローマ軍によって成就したが、その裁きの背後にあったのが、霊的指導者たちの罪、また、民衆の神に対する反逆だった。彼らは預言者たちを迫害し殺すことによって、与えられた悔い改めの機会を意図的に拒絶し続けたのである。

〈預言者たちを拒んだ罪と裁きの予告 (29～36)〉

ネヘミヤ記9章26節には次のように記されている。「しかし、彼らはあなたに背き、反逆し、あなたの律法を捨てて顧みず、回心を説くあなたの預言者たちを殺し、背信の大罪を犯した。」またステファノは、「いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました」と言っている（使徒7:52）。また主イエスも「ぶどう園と農夫」の譬え（21:33～41）を通して同様の罪を指摘され、最後には神の子である主を人々が殺すことを示唆された。

律法学者やファリサイ派の人々は、「預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしている」（29）が、実際には神の使者を迫害している、と彼らの矛盾を指摘された。それは悔い改めの拒否であり、神はその罪のゆえに彼らを裁かれるのである。旧約聖書にある正しい者が殺された最初の記録がアベルに関してであり（創世4:8）、最後がゼカルヤに関するものである（歴代下24:20～22）。

主は「はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってく

る」（36）と言われ、その時代の人々に裁きが行われることを予告された。

〈人々の罪に対する嘆きと彼らへの愛 (37～39)〉

ここからは批判の矛先が律法学者やファリサイ派の人々から、民衆を含めた神の民全般に向けられている。民衆も同様の罪を犯し続けてきた。そしてその罪のゆえに、彼らも裁かれるのである。

エルサレムは神の都と呼ばれていた。「エルサレム、エルサレム」という呼びかけは、第一義的にはその都に住む人々を指している（ルカ19:41～44参照）。その代表が宗教的指導者たちだったが、これは、エルサレムという都が人格化されていると考えられるので、神の民であるユダヤ人全体への呼びかけと考えられる。

めん鳥がひな鳥を羽の下に集める行為は、ひな鳥を危険から守り、保護し、養い、親としての愛を示すものである。そのように、主は神の民を自身の羽の下に何度も集めようとされた。しかし彼らはその思いに応えず、拒み続けたのである。その結果、「お前たちの家は荒れ果てる」（38）と言われ、彼らへの裁きが来ることが予告された。そして、そのように反逆し続ける人々が、主の再臨のときまで再び主を見ることはない（39）、と宣言された。こう言い残されて十字架へと赴かれたのである。

十字架の上で「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのかわからないのです」（ルカ23:34）と、主はご自身を十字架につけた人々のために祈られた。またローマ書5章8節では使徒パウロが「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」と言っている。キリストは神の子であられたのに、罪人の救いのために命を献げてくださった。ここにわたしたちの希望がある。

（後藤公子）